

# 源氏鶏太「銀座立志伝」論

井原 あや

## 1、はじめに

一九五一年に「英語屋さん」(『週刊朝日』一九五一年六月一二日、夏季増刊号)等で第二五回直木賞を受賞した源氏鶏太は、戦後「サラリーマン小説」を開拓し確立した作家として知られている。近年、こうした源氏の「サラリーマン小説」は、「三等重役」(『サンデー毎日』一九五一年八月一二日号)一九五二年四月一三日号)を中心に研究が進められ、戦後のサラリーマン表象を論じる上で欠かせないものとなった。

ここで、これまでの先行研究を簡単にまとめてみたい。先行研究では、源氏が「サラリーマン小説」の中で描き出す戦後社会の「明るさ」に注目し、例えば鈴木貴宇はそれらを「明朗サラリーマン小説」と

指摘している。<sup>①</sup>こうした先行研究が目立つ一方で、坂堅太は、先行研究が源氏鶏太の「サラリーマン小説」に見た「戦後的」な「新しさ」や「明るさ」を所与のものとはせずに、それらがどのような文脈で登場し、背後にはどのような社会的力学が働いていたのか<sup>②</sup>を問い、「初期作品における「戦後」は、むしろ敗戦国が味わった混乱・苦境というかたちで示され<sup>③</sup>ていたこと、そして「『三等重役』以外の源氏作品には、戦後の傷跡、敗戦後の物資不足に苦しんだ弱者としてのサラリーマン像が描かれており、そこにはむしろ暗い戦後の風景が広がっていた。「民主化」という戦後の価値観を強調する『三等重役』の「明るさ」とは、それらの暗いイメージを切り捨てることによって生み出されたものであった」と新たな論を提示している。<sup>④</sup>

元来「サラリーマン小説」が人気を博していたこと、また先に挙げたように近年の先行研究の充実ぶりもあって、源氏鶏太といえば「サラリーマン小説」というイメージが強いが、一方で高度経済成長期に急増したB・Gに関する小説も発表していたことも忘れてはならないだろう。源氏は、B・Gの室井双葉を主人公とした「若い仲間」(『明星』一九五九年六月号～一九六〇年六月号)や、丸の内の一流企業で受付嬢として働く麻美子を主人公とした「喜びと悲しみがいっぱい」(『女性明星』一九六二年一月号～一九六三年二月号)なども書いていたし、また、『読売新聞』が一九六二年四月三日から同年六月九日(いずれも朝刊)まで、全四五回にわたって連載した「新B・G読本」では、その題字を担当していた。つまり、源氏はサラリーマンのみならずB・Gについても多く言及していたのである。

そこで本稿では、源氏の「サラリーマン小説」については研究成果が着々とまとめられているものの、B・Gの小説については、いまだ研究が進められていない状態を踏まえ、元B・Gを主人公とする小説「銀座立志伝」に光を当ててみたい。この「銀座立志伝」は、『女性セブン』の創刊号である一九六三年五月五日号から同年

二月一八日号まで連載された小説である。B・Gが主要な読者であった当時の女性週刊誌において、元B・Gである寺沢一実を主役に据えた「銀座立志伝」はどのように読むことができるのか、B・Gを取り巻く言説を重ねつつ、変貌する一実の姿から何が見えるのか、「銀座立志伝」の読解を試みたい。(以下、本稿では「B・G」「O・L」と表記し、引用の場合は、もとの表記に従った。)

## 2、女性週刊誌とB・G

まずはここで、一九六〇年代の『女性セブン』をはじめとする女性週刊誌の状況と、B・Gについてまとめてみよう。

『女性セブン』は、先述の通り一九六三年五月に小学館より刊行された女性週刊誌である。『女性セブン』初代編集長の豊田亀市に取材した江国滋は、創刊当時の状況について、「女性週刊誌四誌の三番手として小学館から『女性セブン』が創刊されたのは昭和三十八年五月である。いちばん古い『週刊女性』は低迷を続けていたが、三十三年創刊の『女性自身』が実売八十万部というどぶ

鳥落とすいきおいで独走していたこの時期に、豊田さんを初代編集長とする「女性セブン」が戦列に加わった」「もつとも、創刊号はよく売れた。発行部数四十五万部。九四パーセントの売行き。それが第二号で「ガタツと落ち」て、以後三年近いあいだ赤字が続いた」<sup>(3)</sup>と述べているが、源氏鶏太による「銀座立志伝」と、松本清張の「翳った旋舞」の二篇を同時に連載小説として掲載した点などからは、創刊に対する大きな意気込みが感じられよう。

言うまでもなく一九六〇年代とは、日本社会が高度経済成長期と呼ばれた時代の真っ只中であつた。『女性セブン』をはじめとする女性週刊誌は、同じく高度経済成長期に時代の要請によって生まれた、働く若い女性（特に未婚の女性事務職）たちをB・G——のちにO・Lと呼んで雑誌の主要読者として囲い込み、彼女たちの圧倒的な人気を得ていくことになる。そうした女性週刊誌とB・Gとの関係は、「忙しいOLたちにとって、女性週刊誌は、たしかに現在の社会を感じさせるものである。だが、それだけで満足して、現代社会を理解していると考えたりするとすれば、それは錯覚というべきだろう」<sup>(4)</sup>というような、女性週刊誌に偏りすぎる状況に対

する批判ももちろん見られるものの、「ちかごろ電車の中で読んでいるものといえば、ほとんどスポーツ紙か週刊誌である。ことにB・Gふうの娘さんは、全部が全部週刊誌といつてよい」<sup>(5)</sup>「あかぬけのした表紙、色彩豊富なグラビア……たしかにコストのかかったゴージャスなものだ。このゴージャスさがお気に召してか、女性の週刊誌は、この一年ほどの間に五割方ふえて、昨年は一年間に一億百万冊も出版された」<sup>(6)</sup>というような意見もあり、働くことに忙しい彼女たちの良き相棒として女性週刊誌が存在していたことがうかがえる。

ただし、高度経済成長期に増加したこのような働く若い女性——B・Gたちの「働くこと」の内実には注意が必要である。近代日本の女性事務職に対する「意味づけの変遷」を丹念に辿った金野美奈子は、「職場は家庭とは対極にあるもの、という戦前の概念」<sup>(7)</sup>が戦後になって大きく転換し、女性事務職がどのように意味づけられ、形作られたのか、次のように指摘している。

一九六〇年代初頭には、これが（引用者注・職場が家庭生活と類似しており、家庭生活に必要な技能を習得する場であるという考え方を指す）さらに展開

され、職場と家庭との境界が薄められていく。(略)「女性」の勤続は結婚までであることが前提であっても、その限定された期間内では、「女性」はあたかも真剣な結婚生活を送るように職場に真摯にコミットすべきなのである。職場は家庭生活を準備する場にとどまらず、家庭そのものと連続した、もしくは家庭とアナロジカルにとらえうるものとなっている。<sup>(8)</sup>

戦後の事務職における「女性」カテゴリーは、仕事のジェンダー化と労働者のジェンダー化とが相互に支持しあうことによって生みだされる、意味の構造によって支えられていた。「作業」と「接遇」という仕事と、「短期勤続」とが予定するのは、「私生活を犠牲にする」ほど仕事に打ち込みはしないが結婚や出産までの間は与えられた仕事に真面目にとりくむ、という女性事務職像である。<sup>(9)</sup>

右に挙げた金野の指摘をまとめてみれば、一九六〇年代のB・G——O・Lたちが職場(企業)で働くことと彼女たちが結婚した末に持つ家庭とは、地続きの場であ

るという意味が持たされていたことになる。当然のことながら、男性中心社会においてB・Gたちに「サラリーマン」と対等の位置は与えられていない。

ここまで、一九六〇年代の女性週刊誌やB・Gについてまとめてみた。源氏鶏太の「銀座立志伝」は、こうしたB・G(正しくは元B・Gであるが)を主人公に据え、B・Gを主要読者とする女性週刊誌『女性セブン』に連載されたのだが、その主人公・寺沢一実をどのようにとらえたら良いのだろうか。

### 3、「B・G」と「ホステス」

先に述べた通り、「銀座立志伝」は『女性セブン』の創刊号から三三回(一九六三年五月五日号—一九六三年二月一八日号)にわたって連載され、一九六四年三月に集英社より同題で刊行された。内容を簡単に示せば、二二歳の寺沢一実が、中小企業である田所電気株式会社(の総務課で働くB・Gであったが、会社の倒産によってその職を失ってしまう。一実は偶然見かけた易者に将来を占ってもらい銀座のバー「東京一」のホステスとなり、バーのマダムである南部祥子や先輩の三也子に初日から

気に入られる。バーの仕事はまったくの素人であった一実だが、バーを訪れる会社経営者や重役たちの派閥闘争の情報を聞き出す「スパイ」にもなり、田所電気を倒産に追い込んだ男（田所電気の元専務・松木）の成敗も行うという活躍をも見せる。そうした活躍の一方で、B・G時代に恋心を抱いていた矢沢の変貌ぶりに落胆し、企業の大株主で一実のパトロンでもある橋本の私設秘書・石沢との短くも鮮烈な恋を経験して「東京一」に勤め始めてから数か月後には、銀座五丁目にある「ろまん」というバーの、雇われマダムの話が舞い込み、その話を受ける決意を固めたところで物語は終わる。

前章でまとめたように、B・Gという存在にとつて企業と職場は地続きであり、結婚生活を送るかの如く職場にも向き合わねばならなかった。一実は、たとえ会社の倒産が原因であっても、そのようなB・Gという立場を奪われ、かつ自ら別の企業のB・Gとして復職しようとは思っていない。「自分で辞めたのでなく、会社がつぶれてしまった」<sup>(10)</sup>（飛び込んできた娘）一実は、社長から会社倒産の報告を聞いた時、「自分が、明日から就職運動にまわらなければならぬのだと思いつつ、田所社長が哀れでならなかった。そして、そのとき、

ふっと（あたし、いつそ、バーに勤めようか知ら？）と、思った」（「火事」とあるように、倒産直後からB・Gに戻ろうとは思っていなかったのである）。

もちろん、B・Gという立場を奪われた場合、そのB・Gが地方から上京したのであれば、自分の実家へ戻るという選択肢もあるだろう。しかし、一実にはその選択肢は残されていない。それは、一実がバーの初日に応対した客に向かい合いつつ父親を思い出した次の部分からも明らかである。

一実は、父親には、会社がつぶれたことも、バーに勤める決心になったことも、いつてやってなかった。そして、自分の間、黙っているつもりだった。いや、かりにわかったところで、自分の決心を変えない。

父親は、田舎で、サラリーマンをしていた。たしか、五十歳になつてゐる筈である。今の母は、二度目の母で、本当の母は、八年前に亡くなつてゐる。一実は、再婚した父親を責めようとは、すこしも思っていない。一実の下に、まだ、二人の妹がいるのだから当然のことであつたらう。が、一実は、二

度目の母を、どうにも好きになれず、家にいるのが嫌さに、東京へ出て来たようなものであった。そして、そのことを今でも、少しも後悔していなかった。

#### （三人の客）

二度目の母との関係は良好とは言えず、「家にいるのが嫌さ」に上京した一実にとって、「田舎」は戻れない場所であった。そして、「本当の母」が亡くなったのは「八年前」とはつきり覚えているが、父については「たしか、五十歳になってる筈」というように、その年齢さえも断定は出来ず、一実と現在の実家との関係は希薄なものと言える。

企業と結婚生活とが地続きのものであったB・Gにとって、企業という場からはじかれたことは、結婚生活からとはじかれたことを意味していよう。企業——結婚生活からはじかれ、「田舎」の実家にも戻れない一実の有様は、バー「東京一」で働くホステスたちに通じるところがある。一実が働くバー「東京一」には、「一年ほど前に、結婚するために、ここを辞め」（バー「東京一」）ものの、結婚生活がうまくいかず、一実と同日に再び「東京一」に返り咲いた三也子をはじめ、もとか

ら「東京一」で働いている「六人の女のうち、三人までが、結婚の経験者であり、失敗者であった」（同）のである。いわば「銀座立志伝」に登場する銀座のバーのホステスたちは、結婚からはじかれた者として描かれており、一実もまた、小説冒頭で彼女らに近似し、重なり合う存在として設定されていたのであった。

#### 4、「生きるため」の仕事

このように一実の小説冒頭からホステスたちと重なり合うものとして設定され、一実の頭の回転の速さも相まって、余計にその強度を増していくかのように見える。バー勤め初日に訪れた客・宮本が一実の「額にキッス」（三人の客）をしないと申し出た際にこそ、「一実は、額にキッスをさせてやるくらい、何んでもないと思った。しかし、他の女への思惑ということもある。はじめからそういう真似をして、凄いい女、とでもいうような噂を立てられても困るのである。とにかく、当分の間は、たとえば、新入社員の如く、神妙にしていた方がよさそうだ」（同）と「新入社員」を思い出し、B・Gをしていた頃に身に付けたであろう処世術で対応しようと

するが、生き残りを賭けた一実がその後次々に下す決断には驚くばかりである。一実は、B・Gだった自分に恋してくれた三人の男を、少しの甘さも加えずに思い出す。

三人のうちの一人ぐらいは、会いに来てくれるだろう。ということとは、一実が、自分の客を持つことになるのである。勿論、三人とも若いサラリーマンなのだ、そうやたらと銀座のバーへ出入り出来るような、身分ではない。が、月に一度か二度くらいだったら、ビールを飲みになれるだろう。そういう場合、程よくサーブスをして、次は、その上役を誘って来てくれ、と頼むのである。あるいは、その気になってくれるかもしれない。そして、そういうことから一実は、この店における自分の位置に、或る程度の重さをつけることが出来るに違いないのである。

一実は、この店に勤めて、まだ、三時間ぐらいにしかない。心も身体も、半ば宙に浮いているようである。が、それでも、自分の客を持つことの必要さを感じさせられているのだった。(略) 恐らく、

マダムも、それを見ていて、一人一人の日給に差をつけているに違いない。だから、こういうところに勤める以上、自分の客をたくさん持たなければならぬのである。

〔自分の客〕

バーに勤めてまだ三時間ほどにも関わらず、一実は「自分の客」をいかに取り込むべきか戦略を練っている。その他にも、バーの近くで起きた火事を見に行く際にも「ましてや、銀座の火事なのだ。明日からの話のタネにもなるに違いなからう」(「火事」と明日以降バーの客に披露するための「タネ」としか考えていない。また、火事現場でB・G時代の会社の社長・田所に出会った時も、「今の田所は、たしかに貧乏であろう。とにかく、従業員への退職慰労金は、私財で払ってくれたらいいのだ。一実も、二万五千円ほどを貰っていた。しかし、腐っても鯛、という言葉もある。またもしかしたら、将来、再起するかも知からないのだ」(「盾の両面」と「再起」した後のことを見据えて声を掛けるなど、その計算高さは端々に見られる。

ただし、ここで注意したいのは、一実のこうした計算高さが、銀座のバーのホステスの有様にはそう簡単には

直結しないという点である。例えば一実は、同じ「東京一」で働く三也子と杏子とを「銀座のバーに勤める女たちの生態については、何んにも知っていないといつていくらい」（「生きていくために」）と思いつつも「見ていて、三也子は、一流の感じがするが、杏子は、その三也子にくらべて、二流の感じなのだ。どこか、安っぽい

のである。これは、美しさとは、別の問題であつた。（あたし、せっかく銀座に勤めるようになったのだから、一流の女になりたいわ）」（同）と、バー勤めの初日にしてすでに銀座における「一流の女」になることを目指していた。しかし、一実はバー勤めの初日に夕食を御馳走してくれた平木になぜバーで勤めることにしたのかと問われた際、「生きていくために」と答えている。つまり、「一流の女」になることへの決意は、先述の通り「田舎」へ帰ることも出来ない一実が、銀座という場で働き、「生きていくために」の手段でしかない。この「生きていくために」という思いは、バー勤め二日目にも「生きていくための商売なのだ」（「腕だめし」）と繰り返されており、銀座で成功を収めようとするホステスとは異なり、生きるための仕事としてホステスを選んだことがうかがえるのである。だからこそ、初日の夜に、三也子から「ママ

さんにはいえないけど、あたし、二年以内に、どんなちいさなバーでもいいから、そのマダムになりたいのよ」（「人生勉強」）という告白を聞かされても「そういう話は、一実にとつて、およそ縁がないような気がしていた」（同）と思うのである。

「東京一」のマダム・祥子は三十歳。「同じころにこの道にはいった仲間で、いまだに人に使われている女が、何人もいる」（「バー「東京一」」）なかで「この道に入つて十年。とにかく銀座で一国一城の主になれた」（同）マダムの生き様は、もちろんパトロンなしには達せられなかったものであるにせよ、まさに「出世」に違いない。「こんどは結婚なんてバカな夢を見ないで、ここのマダムを見習うつもりでいた。ここのマダムのように、この銀座で出世がしたいのだ」（「飛び込んで来た娘」）というように、「出世」を思い描いて銀座に戻ってきた三也子と一実とでは、最終目的が異なっている。

このような一実の思いはバーに勤めてから一週間経過しても変わらず、三也子の「出世欲」（「一週間経過」）を横目に、「しかし、今の一実には、そういう気はなかった。結局は、あと三、四年働いて、その間に金を蓄めて、好きな男と結婚したいのであつた」（同）と考えている。

こうした一実の純真なまでの思いは、以下の三也子との会話にもよくあらわれている。

「男って、案外、お喋りが多いのよ。俺は、あいつとなんて、得意になって喋りたがるのよ、もし、そういう噂がひろがったら、こっちの商品価値が下るだけでしょ？大損になるわ。」

「……………」

「ついだから聞いておくけど、一実さんは、男は？」

一実は、あかくなつて、頭を横に振った。マダムからも、同じ質問を受けたのである。やっぱり、そういうことが大事なのであろうか。B・Gの頃には、そういうことは、別に問題にされなかったようだ。これを別ない方をすれば、バーというところは、いつだって、女の身体が、商品価値に評価されているのであろうか。(略)

「そんなもの、早く捨ててしまった方が、却って、さっぱりしていいんだけどね。」

一実は、つい抗議するように三也子を見た。これでも、自分にとって大事なもの、と思つてきたので

ある。(略)

「一実さんは、自分のバージンを大事にしたい？」

「したいですわ。」

「わかるわよ、一実さん。」

三也子は、姉のようない方をして、

「そうになると、今後のあなたにとって、いちばん重要なことは、それをいつ捨てるか、ということね。」

「捨てないといけません？」

「いけないことはないわよ。」

「だったら…。」

「あくまで、貫き通す？」

「本当に、自分が、この人のためなら、と思つたとき。」  
(「人間の屑」)

自らバーに飛び込んでおきながら、バーの女たちの身体が商品化されることに疎い一実は、マダムや三也子のみならず、バーを訪れた客たちともこの話題になると身を固くする。

確かに、「銀座立志伝」が『女性セブン』に連載されていた一九六〇年代は、戦前からの純潔思想に基づいた性規範が薄れつつあったが、それでも一実にとつ

## 5、女の出世／B・Gの夢

て、「女の身体」がこんなにも直接的に「商品」化されてしまうことには戸惑いもあったろう。本章の冒頭で述べたように、計算高く見える一実ではあったが、その実、「好きな男と結婚したい」と考えている点や、性に対する意識などをとってみても、元をただせばごく普通のB・Gであることが露呈される。バーで勤めてしばらくしても、「今夜、三也子も、他の客とどこかへ何か食べに行つた筈だった。あるいは、将来、銀座で店を持つため、武田（引用者注・三也子のパトロン）だけでは心許ないので、別口をつくるための一つの手段であつたかも知らない。（略）しかし、だからといって、自分は、三也子の真似をしようとは思っていなかった。あくまで、自分は自分なのである。志田のためにスパイになってやるくらいが、せいっぱいだった」（「自分は自分」というように、自分と三也子とは違うものと認識している）。

それでは、こうした一実が、小説のタイトル通り、銀座で志を立てる——すなわち、マダムや三也子の列に連なろうとする契機は何だろうか。それには、次に挙げる「スパイ」活動が大きく関わっている。

「東京一」の客である志田と竹内は、K商事の社長派と専務派の派閥争いのライバル同士でもあった。志田は、一実にむかつてバーに竹内側の人間が来たら事細かに探るようにと依頼をする。一方の竹内は、竹内と月岡総務部長が接待するK商事の大株主・橋本が一実に興味があることがわかると、橋本の機嫌をとるためにも、二〇万円支払う代わりに一実を一夜を共にするよう言い含める。しかし結局のところ、K商事の内部事情を話し「橋本さんなら大株主ですし、公平らしいからこの際、何も彼も申し上げておいた方が、K商事のためになると思つたんです」（「スパイの良心」と言う一実を見直した橋本は、強引に一夜を共にしようとはしなかったのだが、その代わりに自分のスパイになって、派閥争いで揺れるK商事の両派に探りを入れるよう命じ、「君の収入」になるのだから「志田に今日のことを報告」し「一百万のスパイ料を貰うこと」と竹内から「二十万円を貰うこと」と（同）を言いつける。

その金をもらうために竹内へ電話をかけようとした際、一実は「悪党……」（しかも、女の悪党……）そう思っ

てみても、別に嫌でなかった。ニヤリと笑いたくなくなった。しだいに銀座の一人前の女になっていくような気がしていた。B・G時代の自分には、考えられないことであつたかも知からない」「女の悪党」と振り返る。こうして少しずつ「銀座の女」に近づきつつある一実を本気にさせたのは、派閥争いで大株主の橋本のご機嫌取りに一生懸命であつた竹内だつた。待ち合わせ場所にあつた竹内は、橋本と一夜を共にした代金として、約束通りの二〇万円を要求する一実には、「好色にかがやいているよう」「我慢料」な目で「僕につき合わないか、今晚一晚」(同)と誘うのである。そういう誘いに一実が乗るはずもなく、手酷く断られると、竹内は二〇万円の札束で一実の頬を打ち付けて出て行つた。

一実にとって、銀座という場は、B・Gとして働いていた時以上の収入を手にすることが出来る場であると同時に、B・G時代にはなかつたある種の優越感を味わつた場であつた。

「さっきの三人は、同級生なんですって。そして、宮本さんは、A印刷の総務部長さんなのよ。」

「A印刷の総務部長さん……。」

A印刷なら、一実も、その名を知っているほどの大会社である。先日まで、一実が勤めていた会社の名なんか、誰も知らないだろう。つぶれたって、世間は、問題にしない。どうやら、この店へくる客の大半は、世間でも名の通つた会社の人のようだ。しかも部長とか、重役の肩書を持っている。B・Gの頃、一実は、そういう人たちと話をするチャンスがあろうとは夢にも思わなかつた。また、そういう人たちは偉いものと決めていたのである。が、今夜からは、そういう人たちとも気軽に話すことが出来るのだ。

(「臨時収入」)

「東京一〇？」

「ご存じありません？」

「行つたこともないなア。」

「これからいらして下さいませんか？」

「何んだ、君は、バーの客引きであつたのか。」

松本は、露骨に嫌な顔をした。

「いいえ。」

一実は、頭を横に振りながら、かつては、専務取締役として畏敬していた男に、今は、対等で話が

きる自分が嬉しかった。

〔正義感〕

先に挙げた引用は、一実が「東京一」に勤めた初日に抱いた感想であり、後者は、物語の半ばを過ぎた辺り、かつて田所電気で専務をしており、会社を倒産に追い込んだ松木をようやく見つけた瞬間に交わされた会話である。これらの引用からは、一実がバーに勤めた初日からずっと、B・G時代には決して味わうことの出来なかった企業の役職者と「気軽に」「対等」に話すことが出来ると考えていることがわかるだろう。いわば、サラリーマン社会を横目に、同じ職場で働きながらもそのヒエラルキーに乗ることが許されなかった元B・Gに、サラリーマンと対等に渡り合えたという思いを抱かせたのである。しかし、竹内の札束で頬を打つという行為は、実際に橋本との間に性的な関係はなかったにせよ、性行為の代償として二〇万円が支払われたのだということ、また、バーに集うサラリーマンとバーのホステスは対等ではなく「商品」に過ぎないことを認識させるものであったのだ。

それまで、三也子を姉のように慕いつつも、銀座で出世するべく奮闘する様に対しては「自分は自分」と割り

切ってどこか距離を置いていた一実が、「いつも親切にしてくれるので好きなせいもあるが、三也子が、銀座で働く女の代表選手のような気がするのであった。（すっかり、すっかり）」と、声援したくなつて（「打たれる」「銀座で働く女」（同）の代表として三也子を見做し、連帯感を抱いて声援を送るようになるのは、ちょうど竹内に札束で頬を打たれた日の夜であった。さらに、物語の結末近くにおいて、橋本の私設秘書である石沢と思いが通じ、本当に一夜を共にし、「今夜だけで十分」（「これから）」と自ら石沢に告げて恋を終わらせた後、三也子への連帯感はさらに強まっていく。

（あたしって、石沢さんにバージンをささげたというだけで満足すべきなんだわ）

そういうふう思った。

（そのかわり、あたしには銀座がある！）

その銀座の夜の世界で、もっと逞しく奔放に生きていくことである。いい例が三也子である。三也子は、あの薬品会社の武田をバトロンとして、更に、二、三の別口をもつくって、着着と将来に備えている。ある意味で、立派といつていいのではあるまい

か。

(同)

三也子との連帯感とは、つまり銀座で出世することを意味する。憧れではあっても自分とは異なる遠い存在であった三也子は、徐々に一実の前に目指すべき理想として形作られていったのだ。そして、橋本と石沢の提案によって、一実はその三也子さえも追い抜いていくことになる。竹内の仕打ちによって、サラリーマンと互角に渡り合えなかったことを後悔する一実にもたらされたのは、銀座五丁目の「ろまん」というバーの雇われマダムという職であった。あれほど三也子と自分との

違いを繰り返し述べ、銀座で「生きる」こと——恋をして、いずれは結婚するという夢を抱いていた一実であったが、物語の結末において、「(あたしが雇われマダムに?) 信じられないことだ。しかし、夜の銀座で働くほどの女なら、一度は雇われでもいいからマダムになつてみたいのだ。そして、その後で、名実共に、本当のマダムに。一実は、自分にまだまだそんな資格があるとは思っていない。(しかし、やる気になれば……) 一実はそんなことを思いながらバー「ろまん」へ急いでいた」「これから」というように、銀座

での出世をつかみ取ろうとするまでに成長する。

思えば、物語の冒頭と結末に登場する老易者は、一実の未来を明確に言い当てていたのである。物語の冒頭において、一実は易者とのやりとりをマダムに向かって「その易者、あたしがここに勤めることが出来たら、いろいろ苦勞するかも知れないが、きつと幸せになれる、といってくれました」「(飛び込んで来た娘)」と話している。それに対して、易者は結末では次のように一実に返答をする。

「小父さん、見て頂戴。」

一実は、老易者の前に手を出した。

「見て頂きたいのは、今、あたしが受けているお話について。引き受けた方がいいか、断った方がいいか、それだけ。」

老易者は、しばらく見てから、

「引き受けた方がいいですな。」

「そう。」

「あなたにとって、いい話だね。」

「そう。」

「あなた、その話を引き受けることによって、今後、

いろいろの苦勞をするだろうが、結局は、出世出来る。」

「出世？」 (これから)

「いろいろの苦勞をする」という予言は、一実がバーに勤める前にも言われているが、冒頭で言われた「幸せ」が結末では「出世」に変わっている。もちろんこの「出世」は、一実の後ろ盾となった橋本や同志に近い関係となった石沢の協力なくして成し遂げられないであろう。けれども、「出世」——銀座で自分の店を持ち、「本当のマダム」になること。それは、竹内や松木といったような、サラリーマンには一生味わうことのできない「一城」(「バー」「東京一」)の主になることを意味している。女が商品化される場ではあるものの、ここにおいて、一実がサラリーマンにはなし得ない経営者になるのである。このように「出世」の道をひた走る一実の存在は、B・Gを主要な読者にもつ女性週刊誌というメディアにとって、一見すると異質な存在のように見えるかもしれない。

けれども、先走って言うならば、B・Gとはケタ違いの給与を得て、美しい服で銀座を闊歩する一実の姿は、

読者であるB・Gたちに、ほんのひと時であれ、夢の世界を提示したのではなからうか。一実のようなB・Gからホステスへの転身は、何も「銀座立志伝」に限ったものではない。

例えば、『女性セブン』と同じ一九六三年に創刊した『ヤングレディ』は、一九六六年一月一九日号において、「華麗なる夜の職業に生きる女の生き方 全調査／銀座・赤坂の一流ホステス13人の身上調査」という記事を組み、当時「クラブ ひめぎ ホステス」であった田村順子を筆頭に一三人に取材を行った。記事を読むと、「B・G生活を少し経験したが、三年まえエスポールにはい」った「山川光子さん」、「横浜の高校を卒業してB・Gになったが、生活にすぐあきて」しまった「氏家マキさん」、「一時日本橋の商事会社に勤め」約一カ月のB・G生活をして退社した「山本由美子さん」など、ここに載せられたホステスの半数以上はB・G経験者である。この特集の中で田村順子は、「勤め帰りらしいB・Gとすれ違うとき、わたしはそのひとたちの視線がチラチラと自分に注がれるのを知っています。そして、それがうらやましげな視線であることも」と語っている。このように高度経済成長期のB・Gにとって、自分たちと年の近

いホステス<sup>①</sup>は、憧れの存在としてイメージが形成されていたのだ。

企業の経営者や重役クラスを客として相手にするだけの教養と機転を身につけ、B・Gでは到底不可能な報酬を得て煌びやかな生活を送る「銀座のホステス」——「銀座の女」であることは、「銀座立志伝」の中でも、一実の勤める「バー東京一」のマダムや一実の先輩格の三也子が繰り返す言うように「一流の女」の証であった。

「銀座立志伝」の一実は、「B・Gの頃」企業の重役と「話をするチャンスがあるうとは夢にも思わなかった」(「臨時収入」と語っていた。それはB・Gが高度経済成長期の労働力として要請され、期待されはしたもの、企業の中枢部に関わることは決して許されなかったことにも通底しているだろう。「職場のフォーマルな秩序、すなわち職務と地位のハイアラキーとその再生産の外」<sup>②</sup>に置かれ、「とりあえず補助業務者として役立つ程度の、そうした教養をそなえた低賃金の労働者」<sup>③</sup>と呼ばれたB・Gたちが、その職を離れ、女だけのヒエラルキーを形作った場。それが一九六〇年代の銀座だったのだ。

高度経済成長期は、雇用の場にB・GやO・Lと呼ば

れる、働く若い女性たちを創出した。しかし、彼女らの存在が、サラリーマンの夫と専業主婦の妻という家庭を築くまでの「腰掛け」的亜流の労働力であったことは言うまでもない。そうしたB・Gたちを主要読者とする『女性週刊誌』の誌面にあらわれた「銀座立志伝」の一実は、企業内でB・Gという立場より上に昇進することを期待されず、職場のヒエラルキーにも入り込むことを許されないB・Gの限界を知ったうえで見る密やかで危うい憧れであるといえよう。

## 【注】

(1) 鈴木貴宇「明朗サラリーマン小説」の構造

——源氏鶏太『三等重役』論」(『Intelligence』

二〇一二年三月)。源氏鶏太の「サラリーマン小説」

説については、ほかに斎藤駿「源氏鶏太と〈私〉」

『思想の科学』一九七五年三月)、服部このみ「三

等重役」のイメージの変遷——源氏鶏太『三等重

役論』(『金城学院大学大学院文学研究科論集』

二〇一三年三月)も参照。

(2) 坂堅太「二重化された〈戦後〉——源氏鶏太『三

等重役』論——」『日本文学』二〇一五年二月、三三〜三四、三六、四一ページ。

(3) 江国滋「初代編集長登場⑩「女性セブン」 豊田亀市（現・小学館取締役出版担当）『創刊型』編集長の理想と現実」『噂』一九七三年五月、一二二ページ〜一二三ページ。）

(4) 「女性週刊誌とOL」『読売新聞』一九六六年二月二七日、朝刊。なお執筆者は、記事末尾に「石井記者」と記載されている。）

(5) 「美人になるひけつ」『読売新聞』一九六〇年九月三〇日、朝刊。なお執筆者は、記事末尾に「風」と記載されている。）

(6) 注(4)に同じ。

(7) 金野美奈子『OLの創造——意味世界としてのジェンダー』（勁草書房、二〇〇〇年二月、一五〇ページ。）

(8) 注(7)に同じ。一四七ページ〜一四八ページ。

(9) 注(7)に同じ。一八三ページ。

(10) 以下、「銀座立志伝」の本文は全て『銀座立志伝』（集英社、一九六四年三月）により、本文引用後

に章題を示した。

(11) この特集の一人のホステスの年齢は、二〇歳から二八歳であり、「銀座立志伝」の一実の年齢（二二歳）にも、またB・Gとして働く読者の年齢にも重なっている。

(12) 注(7)に同じ。一七〇ページ。

(13) 宮柊二「『B・G読本』をよんで」『朝日新聞』一九六三年三月三十一日、朝刊）

（大妻女子大学非常勤講師）